

与
莫
羽
化

淡淡

平成八年～九年

平成八年

竹山の朝のけぶらひ薄暑くる

白絁着やすきほどの黄ばみかな

終りしと思ひしころの遠花火

白服の旅一度きりに終りけり

秋螢とてかなしきものを貰ひけり

朝顔を秋の花とぞうべなひし

秋風の銀座にいくつ路地稲荷

七夕竹切りし飛沫を浴びにけり

七夕の竹負うて来て孫の家

すこし命まもりすぎたる螢草

秋扇といふ恋の果てめく言葉あり

谷中生姜の名に残りたるわが生地

地藏盆老いきいきと仕切り役

しぶる児を婆が連れ出す地藏盆

露滂沱たる中に音あるいのちかな

月への道ふと吸ひ込まれたき思ひかな

朝の間にきく盆経をよしとせり

生御魂とはわがことと気付きけり

盆燈籠とうに捨てたる家長の座

夢を違へるみ仏ありて菊かをる

濡れ藁苞わらび出でたる菊の起き上る

月明に心のぼらむ燈を消せり

惜しみなく種子ちる音や鶏頭抜く

午後よりの網目を粗くいわし雲

老人に追ひ抜かれをり秋の暮

秋冷をいちはやく知る身の弱り

耳搔いてかさりこそりと落葉の音

新藁の束を貰ひて富むごとし

いちはやく滝が秋気を放ちけり

秋の滝めぐりてわれや瘦法師

穴惑ひめく逡巡のわれにもあり

何かゐて小春の池の水ゑくぼ

うすき肌着重ねしごととき小春の日

羨しとも息長き鳩の水潜り

母の世の玉虫いでぬ鏝筆笥

残菊や老いての夢は珠のごと

牡丹散りし後の風雨のほしいまま

平成九年

網切れる寸前金魚すくひけり

泰山木花蠅いろの夜明かな

まくなぎに道ふさがれし仏みち

肉色に殻透き若きかたつむり

螢火を見失ひたる川あかり

ちちははのあまりに杳とほし迎へ盆

芋殻折る音やさしくて折りにけり

油彩画に罅のはじまる大暑かな

水の上に秋意はじまる嵐あと

秋口までといふ約束のありにけり

晩景に逢ふたのしさの白絢

鳥渡る流れ藻多き海となり

螢火に近づいてゆく息ころし

羊齒叢にたしかひそみし螢かな

瞑るといふやすらぎや露しとど

秋潮のやすらぎに浮く水母かな

送り火や小さきものの数殖えて

月の下椅子二つあり誰もゐず

衰残の鶏頭にして種子無尽

流れ藻のもつれそめたる厄日前

湯壺まで這ひ来し葛の花もてり

しじみ紫といふべき蝶の庭にくる

一枚を羽織り秋意とおもひけり

この家のよく掃かれあり木槿垣

墓洗ふ月射すころを思ひつつ

とつくりセーターより首出して今日始まる

凍滝の凍てをあらがふ雫かも

その中の鳥の巣かくし滝凍てぬ

寄りてくる人の欲しくて焚火焚く

凍鶴の眼を開くとき待てり

日向ぼこ自愛の果の甘えかも

鯛焼を売る路地ありし覚えおく

大年の橋桁水を梳る

逝きし人の齡を惜しむ年の果

誇るもの何せし年か果てにけり

秋
遍
路

平
成
十
年

楫ゆじりは やゆづるべき子のありてよき

春聯の一詩句簡にして豊か

うれしさや今屠蘇の座にありあはす

餅花や間取よき家のところ得て

まだ闇の匂ひの中の初あかり

一月五日は誕生日

賜りし齡をいだく残り雪

福笹に酒の香りもあるもよし

初湯して新湯の沁みに耐へてをり

心もち胸を張りけり破魔矢受け

替へて来し鸞の飾り場少し変へ

やや厚き福藁を踏み家を出づ

繭玉のよろこぶさまに揺れゐたり

紙の雪膝に受けたり初芝居

松過ぎやなすべきことの迫りくる

年賀客酔はせて帰す悔すこし

なづな粥つくづく齡惜しむかな

松の根に勾玉形に残る雪

凍鶴の群に入らんと歩みをり

かへるでの細枝雫や春の雪

野遊びや杖といふもの未だ持たず

冬期オリンピック

翔ぶ男ばかり見てをり春炬燵

春の土もてあそびゐて充つるこころ

一叢の葦焼き春を近くせり

初蝶を見しよろこびを声にしつ

世はすべて先行くおもひ朝寝して

肉ややに厚く蒸されし鯿かな

やはらかき若布をくれし隣びと

夕空に須臾の日を見せ雁かへる

帰るところある喜びに帰る雁

あたたかや雀あらそふ一つ餌に

申し分なく降り春暁となりにけり

かげろふや厩に遠く馬あそぶ

その宿の廓づくりやさくら漬

つくづくと鶯なりけり声聞いて

あきらかに二月の月や榎林

春曉や吾目覚めゐて音もなし

啓蟄の日に見たりけりわが素足

朝の舟みごとにえり鯛を挿して去る

麦踏や不仲の筍の父と子と

花菜漬箸の終りに香りけり

草餅におのづと出来しくぼみかな

切株のまだあたらしき雨水かな

一塊の土負ひ蟻の穴出づる

かたくなに白を守りて辛夷咲く

魼舟の出てよりの雨はげしかり

咲き充ちし桜の息のきこえけり

こもりかること久しくて飛花の庭

巖島 四句

遅ざくら追ひまとひくる鹿の鼻

春潮の朱の廻廊に佇ち久し

南風の船ゆく手に朱の巖島

この宮の納経見たし遅ざくら

志賀島二句

風は初夏「海の中道」といふに行く

社家らしく島の四戸や朴の花

わが桜さかりの頃を旅にゐて

肩触れて肩かゆくなる藤の花

棚藤に夕づく重さふえにけり

五月旅了へて気負もやや育つ

花溶かす雨やひねもす玻璃越しに

持ちし杖使はず提げて遅ざくら

この度も来合せたりし余花の寺

遍路鈴遠鳴る我をさそふかに

花種を蒔くやかろさに悲しめる

遠見にて麦踏む人の動かざる

老遍路と話が合へるさびしさよ

ちる花の夜干のものに付くあはれ

蛤を夜更けに置いてゆきし友

初蝶の素つ気なく我が庭を過ぐ

菖蒲剪る腕に雫からませ

やや派手な単衣と思ひ袖通す

羨しさや螢袋に虫かくれ

ねんごろに筆の穂ほぐす朝の風

青田見に出て俄なる眼のいたみ

辛夷咲き田の水濁る雨後二日

螢袋のぞいて螢など見えす

思ひごと梅雨の改札口開かず

ごきふりを打ち損じての余力かな

筆遅々としてくちなしの褪早し

セルを着て父の世すこし見えて来し

梅雨の蝶迷ふかに来て落着かず

土用芽のはげます如き真くれなる

よき席の西日に変わる車窓かな

出羽 三句

夏山の山寺仰ぎ心充つ

紅花商人の家とて七月の雛飾る

これも幸紅花咲くに来合せて

伊勢 四句

五十鈴川渦巻き濁る詣で路

目覚めよき夏朝焼の鳥羽の海

限りなき真珠生れむ朝焼時

幸か夏八十路なる伊勢詣

足弱の旅やかにかく夏生きて

桃食べてしばらくその香身にまとう

夏瘦せて鏡の裏を通りけり

甚平に余りし足のやりどころ

贈られし大文字焼の炭かをる

新涼や茗荷の載りし朝の卓

酢のものに甘さがありし厄日かな

老といふは病めるに似たり露の芝

梨の皮千切れずに剥けて気分よし

ともかくも豊年といふ稲田かも

秋澄むと思ひ心の奥も澄む

生きてゐて今冷やかに命見つ

今日白露衣まとふ間の裸身に

笹の葉のこぼれる前の露ふとり

幾千の露を散らして日の出づる

爽涼や老身すてし胸張らむ

夢ありてそれも爽やか老い果てて

新涼や一碗の粥かがやけり

秋の句をしるしての筆なよやかに

弓なりに道曲りけり秋の暮

箱根 三句

秋の氣に目覚めてここは湖の宿

穂芒のほぐれ初めの艶なりし

秋さやか早発ち航の波に見ゆ

句碑開きそして米寿祝賀 六句

まほらなる秋空を背に句碑建てり

ながらへて見る秋空の鮮しき

秋空に祝はれて老忘れけり

秋麗の八十八歳祝はれて

祝はれて老の意識の秋あらた

秋さやか祝はれ疲れもつたいなし

臥すころをふと掠めたる秋意かな

島原 四句

島原の秋や八十路を生きて触る

甦る老の血島原の秋に立ち

閑素なる武家屋敷町ザボン熟れ

台風を払ひ意気充つ千々石湾

橘中佐像秋爽充てる中に立つ

雲仙東洋ホテル 三句

雲仙のみごと台風そらせ立つ

皿鳴らすのんのか踊り秋夜惜し

武家屋敷劃して秋の水走る

内庭の枯色を閉ざす障子かな

すこし派手な膝掛に膝つつまる

晩年の冬帽と思ひあがな購ひぬ

少し早きマフラーを出す旅支度

小 さ き 羽 付 け あ り 老 の 冬 帽 子

箱根

雪 の 富 士 臥 し な が ら 見 る こ こ 姥 子

新 雪 の 富 士 見 し 旅 を 至 福 と も

膝 掛 を 忘 れ ぬ 旅 や 年 深 く

裾 野 市 と い ふ 名 の 町 の 俄 か 寒

冬椿ほぐれてここは富士裾野

立ち寄りし旅の一寺の帰り花

年深き旅や三島に鰻食ぶ

小春凧ぎ杖添ふ歩みいつよりか

とどかざる烏瓜けふも仰ぎゆく

淀川長治さん逝く

さよなら三度今身に沁みて聞きにけり

月明にこの身浮かべて遊ばむか

人の家の絨毯厚く美しき

怠けゐる蓮掘りを見てやすらげる

時かけて露の重さの雫せり

秋の暮人恋しさの街に出て

好日や冬蜂に耳掠められ

凧にあらがひ来たる薄涙

凧に葬花を載せし自転車ゆく

晩年に見る凍雲の血の滲み

眼くらめり風が射す鼻の奥

流木を焚きをり能登の浜に似て

今見しは狐火と思ひ身をすくむ

炭火見るさも尊きを見るごとく

離れがたくあり埋み火のある火鉢

今の世に欠くるもの埋み火にあるぬくみ

石落の黄に老のうつつの目覚めけり

年深き闇しんしんと見つめをり

冬蝶の翹伏せてあり真つ平

毛糸編みをり幸世のかたちして

動
き
な
き
冬
蜂
石
落
の
葉
に
見
つ
つ

こ
の
熱
き
分
だ
け
冬
至
風
呂
と
思
ふ

晴
れ
し
日
の
け
ぶ
り
豊
か
に
霜
の
庭

数
へ
日
に
薬
を
も
ら
ふ
日
を
は
さ
み

年
ふ
か
く
底
冷
え
の
日
の
遠
忌
か
な

カラオケの歌ひ納めとなりけり
去年今年かはりもなく我ありて

長命

平成十一年

初富士の見ゆる地に住みめでたけれ

箸袋に名を書く役の未だありし

元日も夕暮となる昏みかな

初花の白玉椿剪るも幸

春聯の下なる席を設けあり

ひとすぢの罫走らせて鏡餅

頭の触れし餅花の揺れつづきけり

蓬菜を飾りて海の匂ひせり

楳の柄赤きをたのむ齡かな

飾海老角全きはよかりけり

初空の下なる至福惻々と

長命のすこしはづかし屠蘇の席

福藁を敷くもうれしき踏むもまた

ましるなる紙展べてあり初硯

初明りつめたき匂ひあるがよき

胸辺に賜はるごとき初茜

若水の桶に波うつ時佳かれ

ひらく音ありやと待ちたる寒牡丹

結び柳よく結び得てめでたけれ

族うかららの中に年酒を過しけり

飾り羊齒濡れ色の間ぞよかりけり

初鏡いまさらの顔映しけり

浸りゐて初湯と思ひなほ沈む

子の家の鏡開きに来合せし

初硯と思ひねむごろに水注ぐ

触るる人あれよと繭玉低く吊る

五日晴わが生れし日を天の祝ぐ

雪の間に見ゆる真土ぞ匂はしき

葛飾に残る春田の畦を踏む

春潮のするどき青にたぢろぎぬ

わが影をしばらく映し水ぬるむ

掌にすくひてこぼす春の水

よく潜かづぐ水鳥のゐて沼ぬるむ

逃げ水を追ふこころまだ衰へず

水ぬるむ深みは魚の影ひそみ

春の水湧くところまだ暗かりし

瑣事一つ納めて撒けり節の豆

使はざる部屋にも節の豆を撒く

いつまでも居坐る寒さ寝返りす

冬ごもり老いては見ゆるもの多き

春一番と思はむとしてやや弱し

十軒店といふ名が残り雛の日

女孫ばかりが居りて雛の日

山笑ふまことや山の笑ひある

末黒野の端嗅ぎて犬いつまである

春の雪こころに降らせ籠りゐる

耳の奥かゆく春くる兆しかも

薄氷音なく破れて魚の影

一步出て冴え返りしにたぢろぎぬ

久々の会合二月礼者めき

すこしづつ流ると見せ浮寝鳥

積るより濡らして終る春の雪

春の沼何かゐるらし水ゑくぼ

夕星の息づき春の近からむ

春めくといふ言の葉にすがりゐる

屋根の雪すべるかたちの雪解どき

春暁を目覚めて何もせずにある

雨水とて申し訳めく雨ありぬ

春を待つ二月の氷室椿園

鎌倉 四句

匂ひ立つ松原越しに春の海

よたよたと行く江の電や春の海

梅が香を追うて稲村ヶ崎町

鎌倉に来て雛買ふ出来ごころ

ひそかなる湿りがよけれ春の土

子の家に泊り雛と一夜寝る

雨の後ひらく椿と信じぬし

椿落す鳥をしんじつ憎みけり

椿落つる音を悲しく記憶せり

忘れ潮忘られてゐる身もよけれ

忘れ潮波の響に揺れてをり

限りなく広がる春の水輪かな

白足袋に染みし鼻緒や花ぐもり

藪中に一塊の雪残りをり

春水の明るき方に志す

辛夷咲く大和路を恋ふ老残り

出来心にあらずよ梅を干しひろげ

わが庭を燕通りし朝まだき

葉を垂れて羊齒叢は梅雨兆しけり

思はざる裏戸に咲いて諸葛菜

花鳥賊の出て賑へる夜の卓

桐の筒花拾ひしことも幸とせり

十薬の咲くより暗き日のつづく

胸釦ひとつ外して若葉の夜

乗つ込みの鮒ぞといひて置いてゆく

浮巢見の舟に便乗したりけり

一口で立ちし新茶を忘れ得ず

妻亡くて朱の衣紋竹残りけり

更衣選ぶも着るもひとりかな

白絣着て身の老を深くする

父の日といふものあると遠く聞き

一束の菖蒲片寄せ湯浴みせる

父祖よりの成業継ぎて菖蒲葺く

子の家の白玉の冷えよかりけり

葛切に京極の夜を思ひ出づ

文字書くと潤ひうまれ早苗月

夏山に一創あるを見たりけり

衣更へて魚のこころで町に出る

夜の雨に橋下の蜩つぶやけり

掌中を鮎のぬめりのすり抜けし

のつけから初鯉売り出る芝居

芒種とふこころに播かむ種子もがな

こころさぶしむ梅雨の空咳ひとつして

妻の忌を修し水無月星潤ふ

籐椅子の飴色におもふ月日かな

集りに遅れて通る夏座敷

端居してかかはり避けし一話題

走り梅雨みごとかはせり一難事

さびしさよ昨年より植田狭まりて

ひるがへる時露とばす葛の花

靈ごと遠き森ゆく捕虫網

夕鰯を買いひ載せむと青き絵皿出す

滝の音におびえつづける葛の花

子と跳ねてゆくあたらしき捕虫網

つられ買いひせる夕鰯の滴れる

車中にて花火を見たる運よけれ

水中花の紅染めし水もよし

捕虫網疲れ疲れて壁に垂れ

暮近く雨となりけり藻刈舟

子等帰るまでに障子を貼り終る

川下に見て秋の花火と思ひけり

滞る流燈たしか我のもの

あまり素直な流燈の流れざま

芒挿し骨壺といふ古き壺

能登の海こたびも秋の色に見し

秋の燈の肩寄せ合へるさまにあり

墓への道花野ありしを喜べり

稻妻に教へられたる我が行く手

野分後深きねむりに入りけり

鰯雲仰ぎ二三歩よろめけり

たつぷりと寝て新秋と思ひけり

新秋の窓に据ゑたき壺ひとつ

八月尽手足つめたく起き出づる

秋立つや我が家を遠く起臥して

水の上を秋風過ぎて波もなし

石のみの庭に立ちけり今日白露

田めぐりの淋しさ遂に水落す

刈田跡人さまよふに似たりけり

旧稿と鞆にありし秋湿り

幸ひか栗飯炊ける湯気に触れ

卓上の蓑虫に筆奪はれぬ

秋螢見しさびしさの眼を閉ぢぬ

夕空の渡り鳥遂に点となる

喫泉のいたづらに噴く翳雲

セザンヌ展出て黄落に気付きけり

秋蝉や少しづつ我ほろびゆく

いづこより流れ球あり黄落期

深大寺

車椅子落葉踏む音やはらかく

木の葉散る中なれば寧し車椅子

落葉焚く煙の中の波郷墓碑

膝さむく在すみほとけ深大寺

深大寺蕎麦食べてより身のあたたまり

浮く落葉押すともなしに水鳥ゆく

朝寒やためらひ癖の身につきて

秋寒し降りためらへる鳥ありて

鰯雲端すれすれに鳥一羽

月明に無情なまでに身を透かす

辿路に行き並びたる秋遍路

地にしばしゐてよりやをら燕去る

帰燕羨し未練微塵もなきごとく

葡萄一粒房をはなれて卓の上

人誰も言はぬ寒さを感じをり

木の実落つひとつと見ればそこここに

黄落をうながす如し我立ちて

老いぬれば身を置きやすし黄落期

石路の黄を名残りの色とおひけり

新障子ましるき中にぬくみあり

椿葉の霜乾きゆく時にあり

冬帽子吾とも老を同じうす

卓上に誰がくれしか葉付柚子

忽忙のこの一年も除夜となり

除夜となりぬ我より若き人逝かせ

かにかくによき年として惜しみけり

後味のよき年忘れなりしかな

月明に

平成十二
～十三
年

平成十二年

初明り浴び立つ我や九十歳

清らなる一月はわが生れ月

門松の色や匂ひや涙湧く

初明りの中なる已れ確かにゐて

葛飾に残れる松の初明り

元旦の穏やかな日を誰も褒む

息止めて見る門松の青さかな

朝ひと時お降りありてやすらぎぬ

新年のまづ仰ぐもの庭の松

賜りしこの一年をひしと抱く

初風呂やすこいもったいなき思ひ

初湯出てすこし身軽き立ち居かも

庭松の雫しづくに朝日射す

輪飾の藁青きうち掛けにけり

読み初めやっぱり師の書選びけり

わが書ある書架にもかけて注連飾り

朝日・霜けぶらふ中に立ちてをり

初 凧 や松原抜けて小松原

初 凧 の中を出てゆく船羨し

繭玉のゆらぎのまだ残りけり

臥しゐても遠く春くる足音して

三つよりてひとつ離れし福寿草

早梅の一樹をかこみ園荒るる

ひたすらな青せめぎあふ春の潮

何よりも冬ぬくきことありがたし

鮒起しといふ風雪にあこがるる

初椿といふべき一花ひらきけり

まだ醒めぬ花びら重ね寒牡丹

寒明けの雨をすなほにうべなひし

その朝の風を東風とも信じをり

雪後の誰も触れたき櫛の幹

昨日わが踏みたる畦の焼かれをり

畦潰えて梅への道をさへぎれり

指をもて花鳥賊を割くひとりの餉

冴返るやもめ箸とも言ひつべし

卷貝の耳何を聴く春渚

雑市に足止め赤き色もらふ

挿木する明日へのこころ淡くして

流氷ばなし寒さこらへて聞きにけり

岬より春来て桶に若布の嵩

ひとりなる麦踏にまたふり返り

逃げ水の逃げたきおもひ曾てあり

その水菜京菜と呼んで愛さるる

野の池のぬるむを色に感じをり

街になき春寒を水の色に見る

曇り日に色強めたる梅の白

落椿うかべ華やぐにはたづみ

昨日より日ざし和らぐ竹林

凍鶴の凍てを解かむと羽をもがき

ざっくくりと切られ水吹く春菜かな

両子寺に句碑建立

ひた走る国東の道雪もよひ

句碑除幕半ばや降りし二月雪

春光のとぼしかれども確とあり

いとし名の両ふ子たご寺じ冬の椿咲く

雪の富貴寺石階のぼる力かな

二 月 光 終 と 思 ひ し 旅 終 へ て

旅 疲 れ 殊 に 深 雪 の 疲 れ かな

夜 の 風 に 落 ち し 椿 の お び た だ し

死 を 競 ふ ご と く に 椿 花 落 す

崖 椿 よ き 死 場 処 と 花 落 す

自づから美醜を尽くし落椿

小澤實さん 二句

こぼこぼと水湧く音の春の澤

蓬萌え葉裏の白をすでに見す

亀鳴くを信じてゐたし死ぬるまで

花過ぎの三日目の雨いさぎよし

落の煮付上手な母を憶ひ出す

疾走の車より見し遠ざくら

客の前未だ手つかずの桜餅

麦踏の足止めて見る葬りごと

出漁の海を背そむに麦を踏む

逃げ水やここ相模野の高速路

能登に句碑建立 四句

春潮の遠鳴る能登を母郷とす

能登五月終と決めたる句碑建てり

青き能登師の地父祖の地わが名の地

ゆくりなく来し能登島の五月潮

羽咋

遠波も夏霞して能登羽咋

沼空墓碑たづねて薄暑の砂丘ゆく

折口先生の御墓や充ちし小判草

夏鶯聞き涙する旅人われ

小判草さゆらぎ折口父子の墓

遠くより寄せて薄暑を運ぶ波

旅果てに来し小松原春の蝉

能登卯波終と思ひし旅了へて

終の旅了へし安堵と夏蓬

梅雨空の昨日に似たるもどかしさ

竹植ゑてより書く文字のしめりかな

俄照りして梅雨の花々疲れさす

四困暗め雨気こめて咲く山法師

鮎美しその焦げ色は猶更に

内に黄をひそめて朴の開きけり

徐々に向き替へつつ墓の居坐りぬ

その孤独教へて墓の去りゆきぬ

暗きへと暗きへと這ふ蝸牛

迷ひ来し蝶に逃げ場をつくりやる

鮎買ひて家路へ心はづみつつ

衣更へてさて行く先に迷ひけり

夏瘦せて世への怒りの失せにけり

おきまりの土橋出てくる夏芝居

籐寝椅子に余りし脚をさびしめり

わが宿の蚊帳吊りし釘残りある

定齋屋を浅草に見て肯けり

莊洋と芒を描きし夏茶碗

穂草揺れ止み蜻蛉の来るを待つ

夏場所や扇の波に勝名乗り

波の間に漂ふ水母魂のごと

青を濃く強気の終り花火かな

螢火を子の手に渡す母若し

あたらしき竹筒匂ふ精霊花

新盆の供花らし秋の花あまた

一度だけ見し大文字眼に描き

亡き人の文字とも見えて秋扇

秋螢呼び名かなしく愛さるる

瘦身の誰より先に知る涼気

ひとりの餉添ふ秋鱒に箸あそぶ

雨後にしていまはの螢ひかりけり

箱根

秋立てり臥すこと多き旅ながら

覚めてここいで湯なりけり秋始

秋の味旅にして食ぶ朝の粥

初萩の小さき花穂紅帯びて

萩芒湯加減もよき朝にして

厠戸に露じめりあり旅幾日

旅にして秋づく夜々の星の色

発つ前の一浴いで湯菼・尾花

高潮や人なくて浜ただならず

一舟も残さず上げて風津波

新涼を身よりもこころ覺りをり

新生姜刻みゐるらし匂ひせり

墓地への道やや曼珠沙華殖えて来て

葛の花溺れむばかり露ふかく

燈籠の薄紙の張りつよきかな

老いぬれば秋の朝寝も許さるる

夜の秋のいのち抱きて寝まるなり

雨すこしありたる後の秋日和

秋草を束ねて露の重さ知る

「沖」三十周年

一つ島沖に浮かべて秋の潮

秋茄子の色たのもしき朝餉かな

葉鶏頭と競はむとして空青き

秋めいて眠りやそれにしたがへり

月明に我立つ他は筍草

秋の寺独り遍路とすれちがふ

同齡の遍路と語る秋山路

知らでもの秋の遍路の氏素姓

秋草をやたらに抜いて胸濡るる

引き潮の勢ひや秋と思ひけり

無月にて川筋なりに戻りけり

いつの間に年々はやき冬支度

花にゐる小春の蜂に恐れなし

鳥渡る旅にゐて猶旅を恋ふ

啄木鳥や木に嘴あてて何もせず

初鴨を待つてゐるらし池の面

秋早くこごえる心抱きゐて

高瀬哲夫さん逝く 二句

若き君逝き老残る石路の花

思ひ出も温く残して神立てり

われいつか庭の冬枯時愛す

枯庭を愛して来る鳥名を知らず

庭石の冬待つ顔の四つ五つ

大ざつぱに藁かけし庭の冬支度

枯山に未だ枯れぬ川侍りけり

枯庭をはげます如く椿咲く

枯葉敷き山の寝支度はじまりぬ

その冬木鳥も見かぎり足止めず

冬霞やや薄けれどたなびけり

冬の星さがせばありし粒ほどに

膝掛けを忘れぬ旅の遠からず

凧や踏切ぎはの一廃家

凧にあらがひつつも去りし鳥

雲一つなき冬山を怖れけり

別れてより凧攻めの真向より

幾山河旅経て来たる冬帽子

冬山に頼れる雲の暖み色

母の香のねんねこといふよき言葉

陽の匂ひ残る毛布を抱き眠る

冬 凧 や煙すこし 洩れ 櫟 原

ひたすらに掃いて冬待つ庭としぬ

冬暖きことすこし不安な思ひあり

すぐ果てるわが家の牡丹焚火かな

昨年より早く湯婆入れてをりにけり

世の事に耳をふさいで冬ごもり

箒入れ却つて枯庭よそよそし

風邪気味の人より早く炬燵して

音立てて焚火はねたる火勢かな

松手入すみ春への日数かぞへ見る

行きほどに顔見世幟はためかず

顔見世や櫓の月の冴ゆるころ

顔見世の狂言にやや不満あり

顔見世や追ひ出し囃子に送られて

ごぼりごぼりと湯婆の湯を捨てる朝

障子張り人拒むごと完璧に

更けてより句会くづれの年忘れ

冬帽を脱ぎてこころの重み減る

否 応もなく除夜の暦のはがさるる

春を待つ餅ふくよかに搗かれけり

餅ついて春来る前のちぎり餅

今更のうろたへもなし去年今年

平成十三年

見飽きたる筈の初空待つてをり

初日浴び我が肌すこし汗ばめり

九十歳の春や如何にと胸はづむ

劇場の恵方飾りに触れてゆく

初芝居序の三番叟さはやかに

乗合船大喜利に出し初芝居

初富士を見し喜びをひしと抱く

福藁を敷きて何かを待つところ

久々に戻りし我が家の敷松葉

冬椿ほぐるる色を愛すかな

昨日見し枯野の景の未だ去らず

長き貨車過ぎ寒星の宴かな

臥すわれをおびやかすごと寒昂

爪ほどの冬芽なれども天を指す

凧に抗するごとく胸を張る

わが咳の数ほどに増え寒の星

寒星の光濃くなる夜更より

雪嶺の夜更けの月に現れし

春を待つ臥すこと多き身なれども

枯庭にすでに春来る枝の紅

やや曇り色なれど春待つ月のあり

春近しとは信じられずに臥しにけり

肥後椿小鉢なれども泰然と

何なすと言ふにあらねど春を待つ

節分の庭広からずして勝手よき

梅咲いてやや下^{しも}手^てなる庭の奥

よき旅を了へし二月の朝の風呂

雛市の春駅に降り用もなく

抱一の雛とて信じがたく美しき

その小さき扇にひかれ雛飾る

新聞の選を終へて

花残る樹間のありや心待ち

肥後椿花弁花芯をつつみかね

桑解かれ抜け道出来し登校路

片意地の未だ失はず種選び

整然と白魚舟のもどりくる

雪代や茂吉の家と舟を止む

春ながらひと雨ほしき土の色

春の土何か植ゑむとほぐしをり

我が臥所大輪牡丹に見おろされ

白といふ他を押す色や白牡丹

桜咲く使つてみたき良きことば

身の奥に在りし花冷えうづくかな

新しき土の色見せ耕せる

いそぎつつ根分けするもの何と何

花いつも時誤たず巖として

久に逢ふ女弟子あり春めける

九品仏

九つの御仏こまれる花御堂

枕辺を行く川音の確かに春

散る花に全き花のまじり入る

花過ぎて梢うれ艶めける桜かな

中村歌右衛門逝く

行く春を死でしめくくる人ひとり

さくら薬うづたかく寄せ庭の隅

菖蒲根の赤さをたのみ植ゑにけり

二日ほど花冷えつづき色保つ

白牡丹散るや四辺をちりばめて

衣更へて新しく座す袖の位置

夕螢出し湿らひの残りけり

駿河より新茶の着けり永久の香す

梅漬けの残りし一つ紅うるむ

句集
羽
化
うか



発行 平成十三年十月二十四日

著者 能村登四郎

発行者 角川歴彦

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二一三—三

〒一〇二—八一七七

電話 〇三—三八一七—八五八一（編集）

印刷所 株式会社 熊谷印刷

製本所 株式会社 鈴木製本所

©Kenzoh Nomura 2001 Printed in Japan

ISBN4-04-871958-0 C0092